

# 『米語研究序説』

石田 英 二

- 一 はしがき
- 二 米語の發生
- 三 初期の米語研究
- 四 米語の特性
- 五 米英語の相違
- 六 むすび

附表 I  
II

## 一

北米合衆國に於て用いられている英語が英本國に於けるそれと、大體同じではあるけれども亦、色々な點で異つていと云うことは、今更と立てて論ずるまでもなく、世間周知の事實であり、この事實に基いて種々の「米語研究」が行われている。そこで、この「米語」なるものが、どのような研究の對象となり得るか、換言すれば、米語に就いて、どのような研究が行われ得るか、と云うと、それは色々な方面から眺められるのであつて、先づ第一に、その歴史的研究とも云うべきもの、即ち「如何にして所謂米語なるものが生れて來たか、そして現在見られる

ようなものまで發展して來たか、將來如何になり行くであろうか」と云うことが考えられる。第二は「英語と米語との相違」であつて、これは發音・綴字・語彙・語法、延いては文體の問題にまで亘つて考察することが出来る。第三は「米語研究史」とも云うべき方面であつて、この「米語」なるものの存在を意識し、特にそれを取上げて考察の對象とした初期の研究を始めとし、二〇世紀の科學的研究に至る迄の、その研究の發展を跡づけて見ることが出来る。これはまた同時に「米語」そのものの發達の研究ともなるのである。又、少しく研究の範圍を狭くするならば、「米語の語彙に於ける外來要素」などは、人種の増殖と呼ばれる米國の國柄などから考えても、十分興味ある研究の對象となり得るであろうし、又「英米以外の國々に於ける米語研究」や、「英語と比較して見た米語の特質」なども興味ある研究であろう。

我國に於ては既に今次の大戦以前から、この米語と云う現象に着目していた人はあつたし、若干の研究書も出ていた（附表 I, II, III 参照）が、第二次大戦以後は、社會情勢の變化、殊に G I の大量進駐によつて、學者のみならず、一般の人々までがこれに注目するようになり——否、むしろ一般の人々の方が、色々な必要に迫られて英語の、特に實用英語の、勉強に乘出し、（そしてそれは必然的に「米語」の習得へ

移行するのであるが)、英語米語の區別などと云うものを、それほど意識しないで、ただ、學校で習つて來た英語とは少し勝手が違ふ、と云う位のこと、不取敢速成練習を始め、ここに一時は英會話の全盛時代とも云うべきものを現出したのであつた。これは大體から云つて、我國に於ける英語の研究上、勿論喜ぶべき現象ではあつたが、同時にまた、あまりにも上滑りな、一夜漬的米語熱でもあつたので、次第に世の中が落ちて來た今日では、もはやかかる速成的米語研究は顧みられずに消え去らうとしている。それはそれでよいのであるが、少くとも英語英文學專攻の人々は、あくまでも着實な米語研究を忘れてはならない。學問上の見地からは當然であるが、學問上の立場を別としても、その人口、その國力に於て現在老大國の英を凌ぐアメリカ、現代の世界に於ける二大陣營の、一方の中心勢力たる國、の言語は、種々の點から、十分眞實な研究に値するものである。

ところで、從來の研究、殊に我國に於けるそれは、どのようであつたかと云うと、主として發音・綴字・語彙等に於ける、英語との相違と云う點にのみ重きを置いて、他の點を顧みなかつた憾がある。これは外國に於ても略々同様であつた。例えば「ズボン吊」のことを米語では *suspenders* と云うが、英語では *braces* だとか、英語で *suspenders* と云えば「靴下止め」であり、一方我國でよく用いられる *garters* と云う言葉は、あれは米語である、とか、又、*either* と云う語の發音なども (*aiðə*) が英語で、(*i:ðə*) が米語だとか、又、綴字に關しては、語尾の *-our* や *-re* は英國流、それに對して *-or* や *-er* がアメリカ流だ、とか、そう云つた風な差異を列擧して足れりとする傾向が多かつたと云えよう。勿論

最近に至つては、文體に着目した研究(例えば附表Iの *No. 55* の如き)や、米語の特質を論じたもの(同じく *No. 56*)なども現れてはいるが、それは未だ極めて少數である。從來の我國に於ける研究の大部分は發音・綴字・語彙等に於ける米英の相違にのみ力點を置いていた、と云つてもよいであらう。

然るに、昔と違つて現代では交通機關の著しい發達と共にトーキーやラジオの進歩は、米英兩國間の文化の交流を極度に容易ならしめており、それに伴う言語の交流も亦極めて盛である。今日アメリカで生れた言葉が、明日とは云わず、その日の中に英國で聞かれると云つたようなことも *possible* であり、*probable* である。「これは英國の側から云つても同じ理窟であるが、從來の傾向から見ても一般に流行する新語等の發生はアメリカの方が盛であり、言語の流れも(英↓米)よりは(米↓英)の方がより多いと考えられる」<sup>①</sup> 従つて米英の相違と云う點にあまり重きを置き過ぎると、とんでもない馬鹿を見ることが多いのではなからうか。米國流の英語が必ずしも米國人にのみ限らぬとすれば、あまりに米英の相違にのみ主力を注ぎ、これを確固不動のものとする時は、往々にして骨折損をすることになるであらう。現に「米英共、教養ある人々の言葉には大した相違はないのだから、特に米語々と騒ぎ立てる必要はない」と考えている人々も多い。併しながらこれは主として *formal speech*, 特に *written speech* の場合であり、更に「英國人が盛に米語を採入れる」ことによつて、兩者間の相違を少くしていることも見落してはならない。一口に云えば「英語の米語化」とでも云われるような現象が行われつつあるのだ。例えば *cut no ice*, *live wire*, *underdog*, *butt*

in 等は (CID) にも見られる米語であるし、初期の探検家、採掘者、鐵道敷設の爲に奥地へ進入した人々などの vocabulary から来た metaphor には特に兩國共通のものが多し。例えば snag, pan out (or pan off), bed-rock, to side-track, wash-out 等があり、又、米國の警察用語からは third degree などが、英國に採入れられた代表的なものであろうし、frame-up と云う語も、一九二八年に英國の或る離婚裁判所長によつて用いられたと云う。又、更に最近では、アメリカン・スラングの phony (or phoney) が英語に入り込んでいるさうである。<sup>④</sup>

以上の如く云つたからとて、これは米英の相違が研究の對象となり得ないと云うのでは決してない。或表現が假令短時日中に兩國共通のものとなつて了つたとしても、その origin を尋ね、それが他の國の言語に取入れられ消化されるその process を探求することは決して無駄ではなからう。私はただ、從來のように「英語では斯うだが、米語では斯うだ」と云つて、はつきりと絶對的な區別をつけて了つたことの愚を指摘しているに過ぎない。米語の研究史は、この米英の相違と云う點から出發しているのであるから、これは決して輕んずべき問題ではない。

併し、前にも云つたように、この方面の研究は既に古くから着手せられ、現在でも常に行われているのであるから、本稿に於ては、むしろ別の方面に主として目を向けて行こうと思ふ。米英の相違の問題は附表 I に擧げた参考書の殆どすべてに於て取扱われていて、研究者はその何れによつても、大體の概念を得ることが出来るであらう。本稿では、後に極めて簡單にこの事にふれる豫定である。

二

一六〇七年 Virginia 州は Jamestown に植民地を建設した London 會社の第一回拓植團<sup>⑤</sup>及び一六一〇年 Massachusetts 州 Plymouth に渡つた puritans の一行、所謂 Pilgrim Fathers を以つ、米國建設の先驅者とすることは常識になつてゐるが、彼等及び、それに續いて移住した英國人は、勿論その當時英本國で用いられてゐた英語を持つて渡つたのである。ところが新大陸に於て從來とは全く異つた生活環境に入ると、自然その環境に適應した言語の必要を感じて來る。例えば本國に於ては全く見掛けなかつた動植物などの名稱は、勢い土人の語をその儘借用するか、又は先に新大陸と交通を開始してゐたフランス・スペイン・オランダ等の人々の語を借用しなくてはならない。又、動植物に限らず、百般の事物に關しても、斯かる必要から生じた外來語の移入と云うことは米語形成上最初の重大な要素の一である。<sup>⑥</sup>そこで從來の英語に、斯かる外來要素が加わり、又一方では、その後、年を経るにつれて、英本國に於ては obsolete となつた言葉や言い廻しが、米國に於て生残り、<sup>⑦</sup>此の點でも亦、自然に英國英語との相違を生じて來た。更にその後、各國民の移住が盛となるにつれて、外來要素は益々多くなり、又一方では國家的に獨立し、國力が増大すると共に、言語的にも獨立の氣分が起つて來て、偶々英語と異なる點のあるのを幸い、「我々の言語は米語である」として、American language と云うことを唱える人々も出て來た次第である。<sup>⑧</sup>アメリカが獨立し、一國家として次第に統一されて來るにつれ、その國民性と云うものが次第に言語の上にも現れて來て、自ら米國流の英

語が生じて来たことも見逃さない。要するに今日現在の如き米語の存在を見るに至つた所以は①外來要素の採用、②廢語の保存、③新語の創造、④國民性に基く語法のスピード化と合理主義、等を以て、その主な原因と見ることが出来るであろう。更に發音に至つては、氣候風土の關係もあつて、或部分では米語特有の nasal twang<sup>⑧</sup>などの現象も起り、所謂三大方言に分れて屢々論じられるのである。

### 三

それでは、斯様にして發生して来た米語は、如何なる人々によつて取上げられ、如何なる研究の對象となつて来たか。これは主として附表Ⅱの Bibliography に載つてゐる名前によつて跡づけることが出来る。以下は常に附表Ⅱを参照しつつ讀んで頂き度い。

先ず第一に名前のおがいつてゐる John Witherspoon (1723—94) は、一七六九年 College of New Jersey (後の Princeton University) の President となる爲に渡來した Scotland の牧師である。(1)の論文の中で、彼は米國流の英語を攻撃したが、その時 Americanism と云う語を用いた。これが米語と云う意味でこの語の用いられた最初の例とされている。彼は八項目に分類して Americanism を論じているが、これは Americanism と云うものが多少なりとも組織的に研究された最初のものであらう。

次の John Adams (1735—1826) と云うのは、第二代目の大統領（一七九七年就任）であつて、Letters と複数形になつてゐるのは三通あるからである。嚴密に云うと“Royal American Magazine”に公にされた

一七七四年の最初の書翰は、單に“An American”とのみ署名してあつて、筆者が誰だか分らないのであるが、Adams によつて書かれた一七八〇年九月五日付及び九月三〇日付の手紙と、趣旨内容に於て一致する爲 Adams のものと推されるのである。第一の書翰では、先ず言語の重要性を述べ、次に、英語は英國に於てかなり發達しているが、それが最高度の發達を遂げるのは、恐らく米國——この光明と自由の國——に於てであらう、と云い、その目的の爲に一つの society を作つて、その會員は Fellows of the American Society of Language と稱すること、その會の種々な活動のこと、及び、その活動によつて米語が改良され發達せしめられる結果、科學の大なる進歩を將來し、米國人が學問の頂點に達するであろうこと、等を論じている。第二、第三の書翰も、同様である。

更に Webster の辭書で我國にも知られてゐる Noah Webster が、米國に於ける英語の上に及ぼした影響を見逃すことは出来ない。彼には幾つかの著書があつて、それが何れも米語の發達と關係があるから、附表には、一纏めにして His Works としておいた。彼が最初から改革者の態度で從來の英語を取扱い、その辭書に於て、またその他の著書に於て、所謂改良式綴字を唱導したその影響は大きい。<sup>⑩</sup>なお彼の辭書中に從來の authority であつた Dr. Johnson の辭書 (1755) に採録されていなかった五千餘の words を採擇したことも、一つの大きな革命である。彼は斯かる主張の下に斯かる事業を行つて、當時の社會から相當の非難攻撃も受けはしたが、米語發達に及ぼしたその影響は看過することが出来ない。殊に「米國人には米國の辭書が必要だ」と考えたことは、一八

二八年版の title を見ても分るが、これが米語の獨立的氣運、少くとも本國の英語との相違と云う idea を促進したことは多大であつた。尤も彼の辭書はあくまで英語一般の辭書であつて、假令アメリカ風を多分に取入れて、アメリカ語の standard を樹立したとは云え、純粹に所謂 Americanism のみを集めたものではなかつた。Americanism のみを集めた Glossary を初めて編纂したのは、次の David Humphreys (1752-1818) である。Humphreys は Connecticut の生れ、Yale 大學卒業。獨立戰爭では大に活躍して Washington に認められ、一七九〇年には初代駐葡公使、後には特命全權大使となつてスペインに行つてゐる。併し、斯かる政治的活動の一方、一七八六年には既に筆の人として多少認められており、劇を二つ書いたりして、所謂 Hartford Wits<sup>⑧</sup> の一人と見なされてゐた。その劇の一つに "The Yankee in England" と云うのがあつて、それに彼は、その劇の中で用いられた特殊な意味の言葉の Glossary を附してゐる。所謂 Americanism の Glossary として最初のものである<sup>⑨</sup>。併しながらこれは要するに American Glossary の最初のものとして珍重さるべきではあるが、必ずしも學問的に見て價值のあるものとは云えない。學問的に見て價值のある最も初期の重要な文獻は John Pickering (1777—1846) の Vocabulary であろう。事實、米語研究史が論ぜられる場合には、大抵この邊から始められるのが普通である。彼は専門の言語學者ではなかつたが、言語に強い興味と關心とを有し、米國公使の秘書として二年間駐在してゐた間に、折にふれて氣のついた Americanism を "expressions of doubtful authority" を書留めて置いたものが、Vocabulary (譯註 H, No. 5) となつて現れたのである。五百餘の words

を集録したこの Vocabulary は、著者が卷頭に附した序文と共に米語研究の古い文獻として貴重なもの。Webster もこれに關して Pickering に書翰を送つたほどであるが、最も重要な反響は、次の Beck の論文である。

これは一八二九年 Albany Institute と云う學會でなされた談話を出版したもので、要するに Pickering の Vocabulary の中から一七の Words を抽出して、これに論評を加えた上、長い序文を附して發表したものである。この序文は Beck の米語觀であつて、Pickering が自分の Vocabulary に附した長い序文と同様、米語研究初期の古い文獻として珍重さるべきものである。

扱て、前述の如く、アメリカ建國の歴史を遡つて考えると、最初の植民が南部 Virginia 州 Jamestown に上陸したのは一六〇七年の初めてであり、一方、北部 New England は Massachusetts 州 Plymouth に Puritans の上陸したのが一六二〇年末のことであるから、南部の方が北部よりも早く植民されたことになる。従つて米語の歴史も南部の方が北部よりも早く始まるわけで、研究にあつても、當然南部地方から先に手をつけるべきであるが、今迄取上げて來たのはすべて New England 地方、即ち北部の米語に就いてであつた。これには理由がある。と云うのは、凡そ古い時代の言語を調べるには、概ね記録による他ないのであるが、今、米語の歴史に於て、北部と南部との Records を調べて見ると、Virginia colony の records が保存されている古いものは、米國にほんの一時滞在する英國人によつて書かれるか、でなければ、變則英語を避けるだけの知識の十分ある書記によつて記されているので、所謂米

語の研究資料としては價值に乏しく、むしろ北部 New England 地方の記録の方が役に立つからである。それで今迄は北部に關してのみ、米語研究の歴史を見て來た次第である。これからは少し南部の方へ目を向けよう。

附表Ⅱ(7)(8)(9)及び(10)は、特に南部方言と關係の深い文獻である。

Mrs. Anne Royall と云う人は、鋭い觀察力を持つた著述家兼出版業者であつて、事業の用向きの爲に全國を歩くうち氣のついた、言語上の特色に就いて記述している。それは、まとまつた一冊の著書となつていないで、彼女の著書の各處に散見するのみであるが、初期の米國方言に關する記録として見逃し得ぬ資料である。又、Dunghison のものは、大體 Pickering のものと同様の形式で、一九三の Americanism を集録し、又、Sherwood (1791—1879) の Glossary 並に Socrates Hyacinth のものも南部方言に關する古い文獻として貴重なるものである。Socrates Hyacinth の名前が括弧に入つてゐるのは、これが pen-name であつて、本當の名前は分らないからである。

ここで一寸その當時の「南部」と云う言葉に就いて説明しておく。所謂「南部」と云うのも、「西部」と云うのも、frontier line が未だ Mississippi 河を越してゐなかつた當時にあつては、要するに極めて漠然たる稱呼であつて、判然と地理的に區別もされないし、又、方言的にも共通してゐる爲、一口に西部部又は the West と云う言葉で表現されることが多い。前述の Royall 女史が、南部旅行に於て注目した方言の類も、その地域は大體一九世紀の初期に於て the West と呼ばれる地方、即ち Ohio 河の南、Allegheny 山脈の西に當る地域一帯である。その頃

の西部と云えば、未だ Land beyond the mountains と云つて一種の romantic な神秘性を多分に有してゐたもので、野蠻な Indian や猛獸にまじつて、勇敢な冒險家の活躍する舞臺と考へられ、James K. Paulding (1778—1860) の R. M. Bird (1803—54) の A. B. Longstreet (1790—1870) 等の筆による frontier novels の scene であつた。そして斯かる西部の生活なり、人物なりが、特殊の興味を以て眺められた大きな原因の一つは、そこで話された、又は話されると考へられていた、特殊な言葉であつた。これ等の言葉には風變りなものが多く、普通の人、特に外人などには殆ど分らぬものばかりである。併し、一九世紀初期の作家達が、所謂西部の生活を描こうとする時には、そのような言葉を盛に用いたのであつて、例えば Paulding の劇で「大當りをとつた」と云われる The Raw Kentuckian, or the Lion of the West (1830) の一部分などには、特に風變りな、その當時の西部方言が見られる。尤も、このような方言は大部分その地方の人々の造語ではなくて、廢語か、或は又、あまり一般に用いられなかつた語に過ぎない。

ここで再び話を元に戻して、我々は一九世紀前半のアメリカに於ける文人として知られてゐる James Fenimore Cooper (1789—1851) が、また Americanism に就いて注意を拂つてゐたと云う事實を知ることにも強ち無益ではなからうと思ふ。彼は小説家として、殊に The Last of the Mohicans (1826) 他四篇の、所謂 Leatherstocking Tales の作者として有名であるが、一八三八年に出した The American Democrat, or Hints on the Social and civic relations of the United States of America と云う本の中の「On Language」と云う論文の中で、米語のことを

述べている。

斯くの如く、アメリカに定住してアメリカ人となつてゐる人々が、米語と云うものに注意を拂つてゐるのみならず、一時的に英本國からアメリカに旅行して來た人々も亦、その旅先で遭遇した Americanism の特殊性に注意を惹かれ、それを記録したものも多い。そして、斯かる人々の場合は大抵 Americanism を英語の墮落と見なして、嘆き且つ憤慨するのが普通である。併し、その攻撃によつて米語が少しでも英國英語に近くなると云うようなことはなかつた。一九世紀の前半に最も多く斯かる旅行者が米國を訪れ、又、驚くべき程多くの見聞記が書かれたのであるが、その見聞記の中で、筆者が米語に關して述べてゐる場合は中々多い。一例を挙げると Peter Simple (1834) その他の海軍小説を書いた海軍大佐の Frederick Mauryat (1792—1848) の筆になるものがある。(附表II, No. II 参照) 彼の Diary in America with remarks on its institutions は「一八三九年 Philadelphia へ出版され、その中の“Language”と云う項目は、かなり長いものである。又、Dickens が、その American Notes (1842) の中で、ユーモアたっぷりに米語を引用していることは有名である。

扱て、これまでに取上げて來た人々は Pickering & Webster を除けば、何れも語學に關しては素人、いわば門外漢であつた。これから取上げようとする Bartlett (1805—86) も亦、銀行家でありながら米語の辭書を著した人である。併しこれ等の門外漢と雖も、その所説や業績に於ては、初期の米語研究史上に貢獻する所大なるものがあつて、輕々に看過することは出來ない。Bartlett の Dictionary (附表II, No. 12) も、前

述の Pickering その他のものに比べると、ともかくも米語専門の辭典としての形式を備え、dictionary と呼ばれるに足る最初のものとして重要である。

以上、Socrates Hyacinth のものを除き、一九世紀前半迄の研究の主なものを紹介して來たのは、二〇世紀の研究は大體に於て現代の研究家の比較的容易に調査し得る範圍にあり、中でも有名且つ重要な數種のもの、大抵研究室、圖書館あたりで、實物に接し得るのであるから、それにて古い所を眺めて來たのである。その意味に於て、今度は一九世紀の後半に屬する四つの重要文獻を取上げて見よう。Maximilian Scheler de Vere (1820—1898) は、Virginia 大學の近代語の教授で、“Studies in English”その他の著者である。一八七二年に著した“Americanisms; the English of the New World”の序文は一八七一年八月に書かれたものであるが、その中で彼は、Secretary of State であつた Marcy<sup>⑤</sup>が、合衆國の在外使臣に宛てて、自分宛のすべての通信は American Language へ書くようとの訓令を發して、内外で論議を惹起したことから述べ始め、「斯くの如くにして American Language と云う言葉が初めて公文書に用いられ、到る處で眞面目に論じられたけれども、これは半面の眞理に過ぎないのであつて、未だ American Language なるものは存在しない」と斷を下している。彼によれば、アメリカ人は未だその新世界の建設にあまりにも多忙である爲、言語問題に迄十分氣を配る餘裕がない。ほんの時たま新語が造られたり、西部地方の生彩に富む言葉が生れたり、外國語が導入されたりするだけである。故に米國人は未だ英語を speak しているが、talk しているのは米語であつて、歐洲人

は外見や文化の點では英米人の區別をつけることが出来ぬけれども、一旦その言葉を聞くと、intonation や choice of words や structure of sentence などの點で、米人は米人であることがはつきりするのである。そしてその相違と云うものは、極く微細なものではあるが、characteristic なものである。そして一國民の習性や氣質を知るには、その國民の watchwords や nicknames, 又、語句の好悪を研究するほどよいことではないから、ここにそのような特徴を集めて、アメリカ人の話法の概念を得ようと思ふのである。と云う。彼はこれまでに出了た Americanism の文獻として Pickering と Bartlett 及び Elwyn のみを挙げ、中でも Bartlett のものは非常に完全であつて、その發行の年と今日との間に色々な事が起り、様々な新語が発生していなかつたら、今更ここに新しい米語辭書を編む必要もない程であるけれども、實はその間に南北戦争やその他色々な出来事があつて、多くの新語や新しい語法も生じているから、これ等の語が消滅してしまわないうちに、又、その起源の忘れられてしまわないうちに、これを記録に留めておくことが望ましい。と云う。

以上のような見解の下に de Vere の著書は生れ、そして米語發達史上の古典的文獻の一つとなつてゐる。内容は以上に紹介した序文(三頁)と六五五頁に亘る一二の章及び一九頁の Index とから成立つており、單なる語彙の體裁ではなくて、各章が獨立した論文の形式を持つてゐる。Indian からの借用語を論じた第一章は、その方面に關する最もすぐれたものであらうと Mencken も折紙をつけてゐる程である。<sup>⑧</sup>この Schele de Vere と云う人に就いては、Mencken が少し述べてい

るだけで、詳しい事は分らない。Webster's Biographical Dictionary (1943年)の簡単な記載によれば、Sweden 生れの言語學者で、一八四三年アメリカに移住し、Virginia 大學で近代語の教授をしていたらしい。

次に出て来る Furner に關しては、その年代すら分らない。前記の Webster's Biographical Dictionary によつて、この人は "Americanisms Old and New" の著者であり、且つ、W. E. Henley と共に、"Slang and its Analogues" (1890—1904) と云う俗語辭典を著していることしか分らない。併し、Mencken によれば、その他にも種々の著書があるらしい。<sup>⑨</sup>何れにせよ、彼が相當の學者であつたらしいことは推察される。彼の Americanisms Old and New (1889) は London の Thomas Poulter and Sons によつて privately に print され、限定された私家版であつたらしい。巻頭に一一頁の前書きと、五頁の書目表、(Authorities and References to Periodical Literature) があり、それから五六四頁の米語辭典があつて、あとには何も無い。Mencken によれば、これが約五千語を含んでゐるとのことである。<sup>⑩</sup>辭典の内容は、實例を出典と date とを示して豊富に擧げてあるのが特徴と云えるであらう。挿畫はない。

出版年代から云つて Furner のものに次に位する Mitland の辭典に就いては差當り知る手段が無い。Mencken の Supplement One (p. 167) に Americanism の Categories を set up してゐない本の一つとして、その名が見られるのみである。

B. Matthews の著書に就いては、もう少し詳しいことが分る。Matthews は New Orleans 生れの英語英文學者で、Columbia はじめ四

ケ所の大學に學び、初めは法律に志したが、後、文學に轉じた。一八九二—一九二四年の間、Columbia 大學の教授をつとめ、小説や劇の創作<sup>著者</sup>。Authors and Players Club の創設者の一人であり、American Academy of Arts and Letters の理事 (1922—24)、Modern Language Association of America の會長 (1910)、その他種々の學會に關係がある。米語に關心が深く、Americanisms and Britishisms 以外にも、Parts of Speech (1901, 1916) や、Essays on English (1921) その他<sup>々</sup>、米語を論じた論文が多い。幕末に來朝した最初のアメリカ領事 Townsend Harris の甥に當ると云うから、我國に縁の無いこともないが、この Matthews の米語に對する態度は Mencken に云わせると、あまり確固たるものではなくて、最初は好意をもつた研究家のごうであつたが、世界大戰中に pro-English の態度に變り、英米語の相違など大したものではない、將來英米語の分立などの起る氣遣いはないと云ひ出した。併し、一九二六年頃には再びもとの態度に逆戻りしている。兎も角、當面の問題として我々がここに取上げる書物は、その本の標題を有している論文を収めた一の論文集であつて、必ずしも米語のことばかりを論じた本ではない。

一九〇二年に出た Sylvia Clapin の New Dictionary of Americanisms は、約五二五〇語を含むとのことであるが、遺憾ながら實物に接してないので十分な紹介は出来ない。唯、一一〇の Indian loan-words と四六の Dutch loan-words を採録していることだけ分つている。又、その中で米語を四つの categories に分類している。即ち、

(一) 英國では廢語や方言となつてゐるが、アメリカでは一般的に用い

られてゐる正真正銘の英語。

(二) 英本國に於けると異つた意味で、アメリカに於て用いられた英語。

(三) フランス語その他、英語以外から入つて來た言葉。

(四) 本來の英語、即ちアメリカで造られた言葉で、新しい觀念とか、特殊な産物などを現すもの。  
の四種類である。

Clapin は Canada の人<sup>々</sup>、一八九四年に Montreal の Dictionnaire canadien-français を出版し、その中で米語に對する多少の關心を示している。又、ここに取上げた米語新辭典の附録には、米語並に slang に関する論文を四篇收めてゐる。著者の年代は不明。

さて、米語の研究を初めて科學的な立場に置いたと云われる Thomson の American Glossary (1912) 以下、二〇世紀に入つてからの研究には長足の進歩が見られ、米語の研究史を眺める場合には、それ以前の研究書に比べて質量共に優れているものであるが、前述の如く、二〇世紀の研究に關しては、實物に接し得る便宜も多いので、ここでは比較的研究者の接し難い、以上の古文獻を紹介するに留めておき、次には米語の特質を眺めようと思う。

#### 四

米語の特質と云うことに就いては、既に多くの學者によつて種々論じられてゐるが、要するに保守的と進歩的と云う相矛盾した二つの面に盡きる。その保守性と云うのは、前にも述べた様に、移住の際に持つて來

た英語を守り続けている間に、或種の語句に關しては英國でそれが廢れてしまつたり方言化してしまつたりした結果、現代英語と云う點から眺めて著しく古めかしい一面が、米語に見られるようになって來た、そのことを指すのである。Vocabulary の面に於ける例として、homely, baggage, guess 等を前に擧げた、その他の例も多い。autumn に對する米語は fall であるが、これとも、その起源は英國にあり、唯それが現代の英國では方言化して、成語以外には用いられなくなつていただけのことである。又、發音の例を一つ取つて見るならば、英語に於ては一八世紀に [ɪw] から [w] へと移行した語頭の w の發音などが、アメリカではその儘保存されており、更に綴字に關しては、普通 honour などの語に於ける語尾の -our が英國式で、-or と綴るのが米國式とされているが、これも遡れば一七世紀までは英國でも -our, -or は區別なく廣く用いられ、例えば First Folio では honor が honour の二倍も多い、と云つた様なこともある。re に對する -re も一六世紀から一八世紀にかけては、英國でも行われていたし、gray, plow は一四世紀、defense, offense は一三、四世紀以來の歴史を有してゐる。又、dialect の方面から見て、米語をアイルランド方言と關係づけて見る人もある。<sup>(2)</sup>

以上の様な次第で、現代の英國人から見て、米語がエリザベス朝時代の言葉を保存していると云つて、その保守性に驚くこともあり得るわけであるし、又、英國で疾の昔に dialectal となつてしまつたものを米國で用いていると云つて不思議に感ずることもあり得る。

この反面、また一方ではどんどん新しい語や語法を創造して行くこと

も見逃せない。果して嚴密な意味に於て進歩と云えるかどうか分らぬが、假にこの現象を進歩性と呼んでおく。保守性と云う語に對して、分りがいいからである。そしてこの言葉の意味を廣く考えるならば、米語によく見られる様々な特色が、此の一語に包括される。例えば屢々米語の特徵の一つとして擧げられる語や文章の simplification (換言すれば speediness)、その他をも含め得るであろう。

廣い意味で云えば、米語の特質は實に以上の二つ、進歩性と保守性の二つ、に盡きると云えよう。勿論これを細かく見て、生産性(≡多くの語や語法の創造に富むこと)、遠心的傾向(≡語義が擴大されて行くこと)、同質性(≡方言的特徴の少いこと)、Speediness(≡語及び語法の簡易化)<sup>(3)</sup>等々に分類することは出来るが、要するにこれ等すべては、一括して進歩性の中に含め得るであろう。この様に細分するならば、保守性の方に關しても色々の項目を擧げ得るであろうが、ここでは一括して保守性と云う言葉を用いておく。そしてこの二つの相反する特色は、不思議にも併存して、共に米語の特異な存在を形成しているのである。例えば、表現力に富み、humorous expression に富んでいると云うことは、一面に於て表現の effect を強める爲に、所謂 big words を好んで用いる傾向と一致し、一方に於て speediness や easiness と云う特徴があるのと並んで、"polysyllabic, elaborate and fantastic"<sup>(4)</sup>な語や表現を用いる傾向もある。

Speediness を追う傾向、Weekley の所謂 "monosyllabic and impressionist tendency" は殊に American slang によく見られるものである。<sup>(5)</sup> Weekley が擧げている若干の例を拾つて見ても、次の様なものがある。

crook, crank, boom, slump, bluff, pep, stunt, 又 compound としては dope-fiend, high-brow, rubber-neck, sob-stuff, wisecrack 等に、この傾向は見られる。更に tall (||incredible), steep (||exorbitant), thin (||unconvincing) 等に於ける語意の變化等にも見られる。

これに反して、一方全く正反對の方向に向う傾向の代表的なものを拾つて見ると、殆どすべての abstract noun の代用をするような "proposition", brainless の意味での ivory-domed, the consummate の意味での the cat's pyjamas, 更に hypothetical expression として greased lightning や till hell freezes などが擧げられよう。又 terse impressionism を好むにも拘わらず、euphemism を愛好すると云う不思議な性質もあつて、leg と云う代りに limb を用いたり、coffin の代りに casket と云つたり、behind の代りに back of を用いたりすることもある。

以上を要約すると次の様になる。即ち Americanism の特性として正反對の二面が見られる。一は簡潔を貴び、新語を創造するなど進歩的な一面であり、一は古語や方言を保存したり、又、表現上の技巧の爲、誇張的な、長い堂々たる語を愛好したり、euphemism を用いると云つたような保守的な一面である。この両面に亘つて更に細い様々な特性を有する Americanism は、今日盛に British English, 特にその colloquial な方面、に侵入しつつあり、保守的な英國人も、此の勢には抗し難くて、次第に所謂「英語の米語化」が行われつつある状態である。

五

米語と英語との相違と云つても、educated people の言語、殊に writ-

ten language は大體同じであり、又 colloquial な面に於ては、Americanism の influence が大であつて、兩者の相違が抹殺されつつあることは、前にも述べた通りである。ここで普通一般に米英の相違として取上げられる若干の點にふれても、それは、これも亦前に述べておいた様に、兩國間の言語の交流——主として(米↓英)——によつて、永久に絶對的な相違とはならない。それ故に、ここでは極めて普通に云われている米英の相違點について、最も簡単に若干の記述をして見ようと思ふ。

(i) Pronunciation

先に米語の保守性と云うことを云つたが、これが最もよく現れているのは發音の面である。原則として living language は場所か變ると、それによつて變化を生ずるものであるが、移住民のそれは、種々の理由から必然的に本國人の言語に比べて變りにくいものである。尤も Americanism の場合は他に色々な條件もあつて、相當に變りはしたが、それでもなお archaic な面を保っている。例外もあるけれど、普通米語の發音が英本國のそれと異ると云う場合、それは大抵米語の方が English であることとなる。例えば屢々米發音を論ずる際、引合に出される path や class の如き語に於ける "Path" は、大抵の英國人が用いる "broad e" よりも古い發音である。又、これもよく引用される secretary の様な語を米語では 4 syllables, 英語では 3 syllables に發音すると云うことなども、その原因を「文字通りに發音しようとする米人の習性」や、米發音の性質として「大體ゆつくり發音される傾向のあること」に歸せられるけれども、これまた古い發音である。それか

ら今一つ、これは近頃になつて我國の辭書などに、今迄とは異つた發音符號が用いられて出してから、一般の人々の注意も惹くようになってゐると思ひが、語尾や、又は子音の前に於ける所謂 "retained r" ①、從來も學者の間では [r] [ʀ] [ʁ] [ʒ] [ʝ] [ʋ] [ʌ] [ɔ] 等、種々の記號で表音されてゐたものである。これも英國に於て一八世紀以來廢れた古い發音である。尤も此の發音に就いては種々の條件を考へる必要があるから、これ等注意すべき諸點に關する Clark の言葉を引用しておへ。

(1) This r is "retained" only in most parts of the United States (and Canada) — not in most of the South or in the speech of most native New Yorkers and eastern New Englanders and some Canadians.

(2) It is retained by many Englishmen, even educated ones, in some parts of their country.

(3) An r between a stressed vowel and an unstressed one, though retained in both countries, has developed (in the last three centuries) divergently, the usual American r in this position having become almost or quite a vowel (an 'r-coloured' vowel), whereas in Great Britain it has tended either to go on being strongly trilled in the north and north-west as it was three hundred years ago everywhere (cf. 'the dog's letter' of Juliet's nurse), or to be reduced in the south-east to a single weak flap of the tongue against the upper gum. ②

我國に於ても斯かる米國音に氣付き始め、それを辭書にも示す様になつたと云うことは、一應の進歩と云つてもよいであらう。

又、これも屢々代表的な米國發音として一般に認められてゐる hot などの [o] を [ə] と發音することも Charles II 時代の英本國に於ては elegant affectation として認められていたと云うことである。

以上は米國音の代表的なものを思いつくままに僅か一二の例を擧げて見たに過ぎないが、廣く米國音に關して研究をしようと志す學者は、附表 I ならば No. 9 や No. 15 あたりを見られてもよろしく、更にもつと詳細な専門的研究をと云うならば、附表 II の No. 20, No. 23, No. 39 が参考となるであらう。又、No. 24 は Krapp 教授のすぐれた研究であつて、その第二卷の大部分が發音の研究に捧げられてゐる。

なお、各語の發音と云うのではなく、Intonation に於ける相違と云うものが、米英人の間に於ては著しく感じられるものがあることも附言しておへ。

#### (ii) Spelling

これに就いても普通一般に所謂米語の研究書なるものを見れば、大抵一應の記載はあるから、事新しくここに論ずるまでもない。ただ普通に米式綴字として引用されるものを二三示すと、前に一寸ふれたように語尾の -our を -or に、-ure を -ur に變へると云つた様な、單純化と合理化とが見られるが、これは所謂米國發音の特徴の一つである "spelling pronunciation" と關連を有つものであることを一言して置く。

交通が発達するまでは、本國の文化と或程度まで切離されていた米國人は、教師によつて口で教えられるよりも、書籍によつて目に寫る文字から知識を吸収することの方が多かつた。そして教師に頼る場合はどうかと云うと、今度はその教師自身が、また、書籍に頼つていたのである。要するにアメリカ文化の源は多少なりとも oral と云うよりはむしろ bookish なものであつた。「本に書いてある」と云うことは今でも——昔ほどではなくても——權威を保存している位である。そして正字法 (orthography) なるものが重要視されると同時に、spelling 通りに發音するのが合理的であると云う考えが発達し、學校教師、所謂 schoolman の連中が、さう教えるようになった。

併し、ここに於ても我々の注意すべきことは、所謂米式綴字なるものを英國式のそれと區別して、絶對不變の相違があると考へてはならぬことである。又、新聞などで極端に space の節約を計る結果、往々にして用いられる新綴字などを目して、米國式と考へてはならぬ。そのような一時的の現象でなく、從來米國式綴字として一般に認められているものを、下に若干示して見よう。多少の例外があることは勿論であるが、大體に於て單純化と合理化の二つの道を辿つていくことが分る。

(一) 單純化の例

<u>English</u>	<u>American</u>
travellad	traveled
cheque	check

(二) 合理化の例

plough	plow
Philippine	Filipine
colour	color
smoulder	smolder
mediaeval	medieval
calatogue	catalog
axe	ax
etc.	

connexion	connection
sceptic	skeptic
analyse	analyze
theatre	theater
enquire	inquire
pyjamas	pyjamas
drily	dryly
gaol	jail
rhyme	rime
etc.	

(iii) Vocabulary その他

Vocabulary や diction に於ける米英の相違に就いては、殆どすべての米語研究書が、list にするとか、その他の方法で、ふれているし、本邦に於ては米英語の對照辭典も出版されている。併し、前にも度々述べたように、この區別を絶對不動のものと思へることは勿論出來ない。例えば baggage をとつて見ても、普通の辭典では、單に「手荷

物、小荷物」の意で、英の *luggage* と對照してあるに過ぎないが、<sup>⑭</sup> Horwill や Mencken によれば、英國でも陸軍では *baggage* が用いられているそうであるし、*luggage* も米國では「未だ小荷物とされる」、空の *trunk* や *bag*」の意味では用いられる。即ち、旅行鞆などそのものの總稱でもつて、一旦旅行用の小荷物にされると *baggage* になるらしい。そしてそれが英國では *luggage* と呼ばれるものなのである。<sup>⑮</sup> これはちと厄介な一例であるが、單なる對照表にすると、これが (英) *luggage*, (米) *baggage* と片付けられてしまふことを思うと、普通一般の米英語對照表も、少し詳しく調べたらどのような發見があるかも知れない。こゝには Mencken が、その Supplement One to *The American Language* の p. 457 以下に示している *list* のなかから、手當り次第に若干を抽出したものを掲げる。この中には今次の大戦に際して、一九四二年に米國の Special Service Division, Service of Supply の作製した “A Short Guide to Great Britain” に載せられた對照表に含まれているものもある。例えば *absorbent cotton*, *bakery*, 以下 *asterisk* を附したものがいろいろあり、*long-distance* や *commutation ticket* のように純粹に American origin のものがあれば、*baggage* や *druggist* のように British origin のものもある。

American	English
A. B. (bachelor of arts)	B. A.
*absorbent cotton	cotton wool
*bakery	baker's shop
*baggage	<i>luggage</i>

『米語研究序説』

*broiled (meat)	grilled
commutation ticket	season ticket
*cracker <sup>⑯</sup>	biscuit
*druggist	chemist
game (e. g. football)	match
*junk	rubbish
*long-distance (telephone)	trunk
period (punctuation)	full stop
*raise (in pay)	rise
telephone-booth	call-box
*undershirt	vest, or singlet
*vest	waistcoat
*radio <sup>⑰</sup>	wireless

勿論これは極めて一部分であつて、よつて以て全貌を窺うべき一斑にも足りぬが、このような *list* は無限に擴大し得るもので、一冊の米英語對照辭典を形成するほどである。(附表 I の米英語對照辭典參照) 單語に限らず *phrase* に於ても米英慣用の相違は多くの研究家の指摘するところであつて、殊に副詞や前置詞が、動詞との結合によつて創り出す諸種の *phrase* は、米語の他の諸特徴と相俟つて、米語獨特の表現となり、延いては文體にも、米語的特色を創造するのである。(附表 I の No. 26 又は No. 30 その他を參照のこと) 一二三の例を拾つて見ると次の様なものがある。

American	English
(be) graduate (—d) from	graduate at (or from)
(half) after (five)	(half) past (five)
get along	get on
(five minutes) of (three)	(five minutes) to (three)
do you have...?	have you—?
etc.	

最後の have の用法に關しては “The Making of English” 中の Bradley の言葉を Horwill が引用して、次の様に云つてゐる。

The use of the auxiliary *do* is correct Eng. only when *have* expresses something occasional or habitual, not when the object is a permanent possession or attribute. It is permissible to say, “Do you have breakfast at eight?” or “We do not have many visitors”; but not, “Does she have blue eyes?” or “He did not have a good character” (Horwill : Dictionary of Modern American Usage, p. 106)

Homely を knocked up, unwell などのようにうっかり用いると誤解を招く場合もないではないが、概して米英の差は、一方の國に於て用いられることが多いと云う丈の話である。尤も米人が好んで創り出す一時的な新語、合成語の類まで擧げるならば、これは限がない。

## 六

以上、幾つかの簡単な考察を試みて來たが、これは要するに今後の研究への手引とも云うべきものであつて、米語の研究に志す人々の爲に、米語と云うもの的一端を窺つて見たに過ぎない。更に進んで研究しよう

と云う人々は、附表の I 及び II に掲げた、本邦並に米英に於ける研究書の主なものを利用せられるがよいであらう。この小論に於ては、研究の初期の歴史を紹介する意味で、一九世紀迄の簡単な紹介に留め、二〇世紀のものにはふれなかつたけれども、研究者にとつて實際上利用價值のあるのは二〇世紀の新しい研究書であることは云うまでもない。中でもその學術上の價値で定評のある Krapp のもの (No. 24) や、米語研究資料の寶庫とも云うべき Mencken のもの (No. 21, 38, 57) などは必讀の書であり、又、辭書としては、英語の NED に相當する DAE (No. 35) が入手困難な今日では、SOD に相當する DA (No. 44) を利用する他はない。前者は最初分冊で出た時、我國にも輸入されていたが、残念なことには Part IX (Flinty-Gold Region) のあたりで、戦争の爲に輸入が杜絶してしまつた。その後、本國では二〇卷で完結し、更に四卷となつて一九四三年に出版されたが、現在では絶版となり、古本で探しても中々入手出来な。幸にして DA が現れたことは研究者にとつての福音であつた。又、Horwill の英語慣用語辭典 (No. 28) は、H. W. Fowler の Dictionary of Modern English Usage (1926) に相當するもので、一四四年の第二版には二〇頁に亘る Introduction が附いているが、これ亦研究者にとつて便利な参考書である。

さて、從來、英語は世界語と云われ、我々にとつても第一外國語として扱われたものであつた。この英語に於ける一つの重要な現象、即ち、米語の進出、英語の米語化と云うことは、現在の我々にとつて看過出来ぬ事象であり、我々は好むと好まざるを問はず、この事象を正視して、米語に對する認識と理解を得る様努力すべきであらう。

元來、我國の英語教育に於ては、未だ米語の認識に於て缺ける所があつた爲、英語米語の區別なく只ひとまとめに英語として教え且つ學んで來たのである。殊に一九二二年 H. F. Palmer が文部省の外國語教授顧問として來朝し、phonetic signs を用いて、英國標準音による指導を始めてからは、我國に於ける英語發音の標準が、全く Jones 式となつて、米國音が影をひそめる程であつた。發音に於けるこの英國化は、綴字その他にも影響を及ぼして、米國流が一種の邪道——とまでは行かずとも、少くとも、とるに足らぬ方言的存在と見做されたであらうことは、想像に難くない。海外に於ては Thorntons の American Glossary (1912) を初め、數多くのすぐれた研究が現れているのに、我國では大正一四年即ち一九二五年の末になつて漸く富田氏による Mencken の紹介が行われた位で、その後も、今次大戰迄に現れた研究書がまことに寥々たるものであつたのは、以上の如き國內情勢の然らしむる所であつた。即ち、米語に對する一般の認識が足りなかつたのである。それが今次大戰の結果、急激に生きた米語に接する機會を多く與えられ、且つ米語と英語との相違に強く目覺めさせられて、從來、英國流の英語一色に塗りつぶされていた感のある我國でも、俄に米語の認識を新にし、米語研究の必要が痛感されるに至つた。勿論、一時はこの爲、却つて一部の人々の反感を買ふようなこともないではなかつたが、それも今日では、既に落着いて來て、他の諸制度に於ては急激な變革の反動として生じつつあるかに思われる所謂「逆コース」に陥ることもなく、冷靜に「米語」は「米語」として、我國の英語研究並に教育に於ける位置を獲得しつつあるのは喜ばしい次第である。(一九五三、九、二四)

- 註 (1) NED などの editor もついで Sir William Craigie (1867— ) によれば、大體一八二〇年頃迄は、米國特有のもの名前以外は neologism の流れる方向は(英→米)であつたが、一九世紀になると、その流れは逆になつてゐると云ふことである。(Cf. The Study of American English, SPE Tract No. 27, 1927)
- (2) これ等の言葉の説明は省略したが、何れも COD によつて見ることが出来る。
- (3) 一五〇名の半數が紳士であつたが、このことによつて、當時、紳士階級の英本國に於ける生活の樂でなかつたことが察せられる。他は商人・労働者・機械技師等であつた。これに婦人や農夫が加わらなかつたのは、此の移民團が恒久的な目的のものでなかつたことを示すものである。なお Virginia の北隣に Maryland 植民地(一六三四年移住)があつたが、これはその性質と目的とに於て Virginia Settlement と全く異なるものであり、英國教會に改宗を背じなかつた Catholic と Protestant とが移つたものである。
- (4) これに就いては、普通 Mayflower 號の名前のみが擧げられるけれども、實は今一隻 Speedwell 號があつた。これは途中破損の爲に引返したので、結局 Mayflower 號だけが約一〇〇名を乗せて、一六二〇年十一月末 Cape Cod の北岸に上陸したのである。併し、其處が定住の地として不適當であつた爲に、一二月二日、對岸にある Plymouth に上陸した。
- (5) 例えば、chincapin (トナリ又は「qua」と綴る) opossun (又は possun) などとは土人語からの借用であり、arroyo はスペイン、batte はフランス、loss はオランダ、等、夫々の國語からの借用である。斯かる種類の外來語は相當多數に上つてゐる。
- (6) 米語の特徴の一つとして、その保守性と云うことが指摘されるのも、これと大に關係がある。例えば、現在英語の luggage に對するものと考えられてゐる米語の baggage など、一四三〇年以來の例が NED に見られるし、drugist など一六一一年以來の例が NED に見られる。plain-looking の意味で用いられる homely を suppose の意味の guess は「普通」米語と云われるが、實は Shakespeare にも出て來るものである。

(7) このことに就いては、Mencken の著書の標題と、Krupp のそれとが、對照的によく引合に出されるが（附表Ⅱ参照）、Cambridge History of American Literature (1917) 中の米語を論じた一章は、その標題に於て Krupp の立場をとり、Spiller, Thorp, Johnson, Canby 共著の Literary History of the United States (1946) 中の同様の一章は Mencken の立場に與してゐる。併し今では米語を英語と對立させて考える人も多く、Weekley なども、"The foreign language which has most affected English in our own time is contemporary American" (一九五二年改訂新版 "The English Language" p. 73) と云つてゐる位である。

(8) これは要するに母音の鼻音化 (Nasalization) であつて、ゆつくりした、平板單調なアメリカ發音と共に屢々聞かれるものである。英國音の [ɑ:] に對して、米語では [a] を屢々用ゐること、及び最近我國の辭書にも見られるようになった [æ] の記號で示される、の發音と共に、此の nasal twang を、米語發音の三大特徴の一つ見る人もある。

(9) Eastern, Southern, Western- (or General) American.

(10) 詳細は研究社「英語學辭典」Webster の項参照。

(11) 一八〇六年出版のものには A Compendious Dictionary of the English Language と云う名前が、それに長々しう説明句がつけられてゐる。此の題辭の全文は前記英語學辭典 p. 1075 に載つてゐる。一八〇六年の此の辭書でも既に用語法に於ける英米の相違を記した點が特徴となつてゐるが、更に一八二八年に出た辭書（二卷、約七萬項）は An American Dictionary of the English Language と題され、米人の辭書たることを明かに標榜してゐる。これが今日の Webster's New International Dictionary となつたのである。

(12) A group of writers who flourished during the last two decades of the 18th cent. at Hartford and New Haven, Connecticut. U. S. A., now chiefly remembered for their vigorous political verse satires. Chief among them were Timothy Dwight, Joel Barlow, John Trumbull, David Humphreys, Richard Alsop, Lemuel Hopkins, and Theodore Dwight. They were all either graduates of Yale or associated with that college. (Oxford Companion to English

Literature)

(13) 本當は Rev. Jonathan Boucher (1737—1804) の glossary が、もと早く、恐らく一八〇〇年以前に起草されたものと考えられるが、これは一八三二年に彼の "Glossary of Archaic and Provincial Words" の第二版中に現れるまで、印刷はされなかつたから、年代から云うと Humphreys のものの方が早うことになる。しかも Boucher の glossary は第二版の序文の中に入つていて、僅か三八語しか集めてゐないから、量的には殆ど問題とするに足らぬであらう。彼の "Glossary of Archaic and Provincial Words" は、彼が卅年を費して書いたものを、彼の死後友人達が出版を企てたもので、第一部の A が一八〇七年に現れ、その後一八三二年に二人の牧師が繼續を企てたが、結局 B までしか出なかつた。

(14) Witherspoon は New Jersey の College の長、Adams は Massachusetts の生れで、大統領としてすこゝ北部で活動した。Webster & Humphreys & Connecticut の人であり、Pickering は Massachusetts の人である。

(15) Cf. M. M. Mathews : The Beginnings of American English, pp. 114-117.

(16) William Learned Marcy (1785-1857)

(17) A. L. Elyyn : Glossary of Supposed Americanisms (1859)

(18) Mencken : The American Language (1936) p. 106 n. だが Menckenによれば、故 W. R. Gerard の手になる Indian loanwords の詳細な dictionary の原稿が、Smithsonian Institution に保存されてゐるが、その一部分は殆ど讀めなう位になつてゐる。將來出版される見込みが、先ずなうと云ふべきである。

(19) Mencken : Supplement One to the American Language, pp. 96-7.

(20) Full title は次の様になつてゐる。

Americanisms—Old and New. A Dictionary of Words, Phrases and Colloquialisms peculiar to the United States, British America, the West Indies &c. &c., their Derivation, Meaning and Application together with Numerous Anecdotal, Historical, Explanatory, and Folk-Lore Notes.

(21) Mencken : The American Language p. 36.

- ⑧ Mencken : op. cit. pp. 65-6.
- ⑨ Americanisms and Briticisms with other Essays on other isms 全 title  
に於て。
- ⑩ 131 の French loan-words を記してあるが、その中今日認められる  
ものは○に足らぬ。(Cf. Mencken, op. cit. p. 108 n.)
- ⑪ 例として附表 I の No. 29 と No. 26 を引く。
- ⑫ 上の條の J 及び K として附表 I の No. 11 なども参考になる。又、語法上  
の archaism として同じく附表 I の No. 26 を見るべき。
- ⑬ 附表 I の No. 30 の第十章 “Americanism の Anglo-Irish” 参照。
- ⑭ “leaning towards the monosyllabic and impressionist type of speech”  
(Weekley : op cit, p. 74)
- ⑮ 附表 I の No. 29 参照。
- ⑯ Weekley op. cit. p. 74.
- ⑰ 同上。
- ⑱ J 及び K の語彙を引く。SOD 及び A の語彙も、各書に於いての語彙を引  
く。
- ⑲ A matter requiring attention, something to be dealt with. Also used of persons  
and usu. preceded by a modifying term. *Colley*. (DA)
- ⑳ Ivory dome = A stupid person (Wescen : Dictionary of American Slang)
- ㉑ Anything very good, attractive, etc. ; American (—1920) anglicized by  
1923 but † by 1933. Cf. *the bee's knees* (Partridge : Dictionary of Slang and  
Unconventional English)
- ㉒ Gen. preceded by *like*. This coll. “emblem” of high speed is orig. (1833)  
and mainly U. S., anglicized ca. 1850. It appears in cricket as early as 1871  
(ib.)
- ㉓ Forever の義で “till the cows come home” 等の義を持つ。附表 I No. 3  
の American Thesaurus of Slang に引く。
- ㉔ Weekley : op cit, pp. 74—5.
- ㉕ [a:] 及び [æ:] として Western American の両面を認めて、  
『米語研究序説』

- 歴史的には [æ:] の方が古くて、一八世紀にはこれが普通であった。(B:) の  
音は同世紀末から現れた。
- ⑳ 上記屢々引用した Weekley の *The English Language* の新版 (1952) に  
て J. W. Clark が米語に關する一章を書かしてあるが、その中で彼は斯く  
説明してある。
- ㉑ Cf. Romeo and Juliet, II. iv, 222.
- ㉒ Weekley : op. cit. pp. 116-117.
- ㉓ 尤も、附表 I に擧げた竹中氏の辭典では、第二部「同一の語句を米英夫々  
異じた意味に解するもの」で、luggage が米では「旅行鞆」、トランク」英の  
は「小荷物」である。
- ㉔ In England *luggage* is a collective term for the trunks, bags, &c., that a  
traveller takes with him. These trunks are not considered luggage until they  
are packed for the journey. In America, on the other hand, it is only as long  
as they are empty that they are called luggage. (Horwill : Dictionary of  
Modern American Usage)
- ㉕ The old difference between the English and American meanings of *biscuit*  
and *cracker* seem to be breaking down. The English begin to use both words  
in our senses, and *biscuit* is often used in America for what was formerly a  
*cracker*, e. g., the *United biscuit*. (Mencken : Supplement One, p. 482 n.)
- ㉖ King Edward VIII used *radio* in a speech soon after his accession, and  
was denounced for the Americanism, but the official organ of the B. B. C.  
is the *Radio Times* (Robert Lynd, London New-Chronicle, May 22, 1943)  
(ib. p. 479 n.)

附 表 (I)

- (1) 富田 義介 「今日の英語と米語」(大正14年 東京 研究社)  
(English and American of Today, 1925)
- (2) 山田 實雄 } 「現代日米會話」(大正15年 東京 泰文社)  
角田 直雄 } (Modern American Conversations, 1926)
- (3) マイケル・ロビンソン } 「英語と米語の比較研究」(昭和2年 東京 開文社)  
相良 佐 } (A Comparative Study of English and American, 1927)
- (4) ノック・マック・マクニッシュ } 「米語の研究」(昭和6年 東京 泰文社)  
吉岡源一郎・大西雅雄譯註 } (Spoken American, 1931)
- (5) 一 矢 慧 「王様英語が大統領英語か?」(昭和8年 神戸 川瀬日進堂)  
(“King’s English” or “President’s English”? 1933)
- (6) 富田 義介 「英語と米語」(昭和8年 東京 英語英文學講座刊行會)
- (7) 重見 博一 「アメリカ英語, 歴史 的及び地方的研究」  
山本 忠雄 }  
定宗 數松 } 「アメリカ英語の問題」(昭和12年 東京 三省堂)  
丸山 學 } (English Teachers’ Library 中の一册)
- (9) 竹中 治郎 「米語の發音と綴字法」(昭和13年, 24年新版 東京 研究社)  
(Studies in American Pronunciation and Spelling, 1938)
- (10) 東村大三郎 「米語と英語」(昭和15年 東京 研究社)  
(Americanism and Britishism, 1940)
- (11) 重見 博一 「米語の發達」(昭和16年 東京 研究社)
- (12) 福喜多靖之助 「英吉利語と米語の相異」(昭和16年 東京 北星堂)  
(Rambling Notes on British English and American English, 1941)
- (13) 岩崎 良三 「現代アメリカ英語の研究」(昭和21年 東京 小學館)  
(The Study of Modern American English, 1946)
- (14) 村山 有 「米語の研究」(昭和22年 東京 日本教育新聞社)  
(The Study of American English, 1947)
- (15) 峰谷 敬 「アメリカ語の知識」(昭和22年 東京 三省堂)
- (16) 高柳春之助 「アメリカン スラング」(昭和22年 東京 文化書院)
- (17) 佐藤 佐市 「アメリカ語を如何に學ぶべきか」(昭和22年 東京 曉鐘出版社)  
(Know-How of Americanism, 1947)
- (18) フロンソエ } 「米語の研究」(昭和23年 東京 白桃書房)  
齋藤清譯註 } (Zur Biologie des amerikanischen Englisch, 1934)
- (19) 岩崎 良三 「現代アメリカ英語の用法」(昭和23年 東京 國際出版社)  
(Present-day American Usage, 1948)
- (20) 竹中 治郎 「アメリカ英語の背景」(昭和23年 東京 國際出版社)  
(The Background of the American Language, 1948)
- (21) 富田 英一 「米語の性格」(昭和24年 東京 語學出版社)
- (22) 龍口直太郎 「米語の生態」(昭和24年 東京 語學出版社)
- (23) 竹中 治郎 「米語の輪廓」(昭和24年 東京 研究社)  
(The Outline of the American Language, 1949)
- (24) 齊藤 静 「英語と米語」(昭和24年 東京 研究社 新英語教育講座第9巻)
- (25) 岩崎 良三 「現代アメリカ英語の用法」(昭和26年 東京 國際出版社)  
(Present-day American Usage: Supplement, 1951)
- (26) 豊田 實 「アメリカ英語とその文體」(昭和26年 東京 研究社)
- (27) 三戸 雄一 「米語の概説」(昭和26年 神戸 神戸商科大学經濟研究會)
- (28) 本橋壽太郎 「最近米語研究」(昭和26年 東京 三省堂)
- (29) 尾上 政次 「米語論」(昭和26年 東京 河出書房 英語英文學講座第七卷)
- (30) 尾上 政次 「アメリカ語法の研究」(昭和28年 東京 研究社)
- (31) 佐藤佐市 「現代アメリカ口語の研究」(昭和28年 東京 徐崎書林)

米 語 辞 典 類

- (1) 松村 寛 「英語對照現代米語小辭典」(昭和5年9月 東京 タイムス出版社)  
(Contemporary American Usage with British Equivalents, 1930)
- (2) 高部 義信 「米語辭典」(昭和21年 東京 研究社)  
(An American English Dictionary, 1946)
- (3) 佐藤 佐市 「米慣用語小辭典」(昭和22年 東京 蒼樹社)  
フル }  
三輪 武久 } 「米語辭典」(昭和22年 東京 語學出版社)  
鈴木 幸久 }

- (5) 齋藤 静 [米語辭典] (昭和24年 東京 三省堂)  
(A Dictionary of Current American. 1949)
- (6) 竹中 治郎 [米英語對照辭典] (昭和24年 東京 桂書房)  
(An Anglo-American Dictionary. 1949)
- (7) 水庭 進 [現代米語解説活用辭典] (昭和25年 東京 ショーバ社)  
(The Current American Interpreter. 1950)

附 表 Ⅱ

- (1) John Witherspoon(1723-94) : The Druid (Pennsylvania Journal and Weekly Advertiser, 1781)
- (2) Letters of John Adams (1774 and 1780)
- (3) Noah Webster (1758-1843) : His Works.
- (4) David Humphreys : Glossary appended to his drama "The Yankey in England" (1815)
- (5) John Pickering : A Vocabulary or Collection of Words and Phrases which have been supposed to be peculiar to the United States of America (1816)
- (6) T. R. Beck : Notes on Mr. Pickering's "Vocabulary of Words and Phrases &c." with preliminary observations (1830) (Transaction of the Albany Institute)
- (7) Mrs. Anne Royall (1769-1854) : Her Works.
- (8) Robley Dunglison (1798-1869) : "Americanisms" (Virginia Literary Museum and Journal of Belles Lettres, Arts, Sciences, &c. (1829-30)
- (9) Rev. Adiel Sherwood : Glossary appended to the "Gazetteer of Georgia" (1827, 1837)
- (10) J. F. Cooper(1789-1851) : "On Language" in his "The American Democrat &c" (1838)
- (11) Frederick Marryat : "Language" in his "Diary in America" (1839)
- (12) John R. Bartlett : Dictionary of Americanisms (1848)
- (13) (Socrates Hyacinth) : "South-Western Slang" (1869) (Overland Monthly III 125-31)
- (14) M. Schele de Vere : Americanisms (1872)
- (15) John S. Farmer : Americanisms Old and New (1889)
- (16) James Maitland : The American Slang Dictionary (1891)
- (17) Brander Matthews : Americanisms and Britishisms (1892)
- (18) Sylvia Clapin : New Dictionary of Americanisms (N. Y., 1902)
- (19) R. H. Thornton : American Glossary (London 1912)
- (20) G. P. Krapp : The Pronunciation of Standard English in America (N. Y., 1919)
- (21) H. L. Mencken : The American Language (N. Y., 1919, 21, 23, 36)
- (22) G. M. Tucker : American English (N. Y., 1921)
- (23) J. S. Kenyon : American Pronunciation (Ann Arbor, Mich., 1924, 1950<sup>10</sup>)
- (24) G. P. Krapp : The English Language in America (2 Vols., N. Y., 1925)
- (25) Anders Orbeck : Early New England Pronunciation (Ann Arbor, Mich., 1927).
- (26) M. M. Mathews : The Beginnings of American English (Chicago, 1931)
- (27) W. H. Wessen : Dictionary of American Slang (Thomas Crowell Co., N. Y., 1934)
- (28) H. W. Horwill : Dictionary of Modern American Usage (Oxford, 1935)
- (29) Ramsey & Emberson : Mark Twain Lexicon (1938)
- (30) W. J. Burke : The Literature of Slang (N. Y., 1939)
- (31) H. W. Horwill : Anglo-American Interpreter (Oxford, 1939)
- (32) R. H. Thornton : American Glossary, 3rd vol. (in *Dialect Notes*, 1939)
- (33) C. C. Fries : American English Grammar (N. Y. & London, 1940)
- (34) Berry & Van den Bark : American Thesaurus of Slang (N. Y., 1942, 1947<sup>11</sup>)

- 63) Elbridge Colby : *Army Talk* (1942)  
 66) Craigie & Hulbert, ed. ; *Dictionary of American English* (Chicago, 1938-44)  
 67) Harold Wentworth : *American Dialect Dictionary* (N. Y., 1944)  
 68) H. L. Mencken : *Supplement One to "The American Language"* (N. Y., 1945)  
 69) Pike : *The Intonation of American English* (Ann Arbor, Mich., 1945)  
 70) John Whyte ; *American Words and Ways. Esp. for German Americans* (N. Y., 1945)  
 71) Richard D. Mallery : *Our American Language* (N. Y., 1948)  
 72) H. L. Mencken : *Supplement Two to "The American Language"* (N. Y., 1948)  
 73) Kenyon & Knott : *A Pronouncing Dictionary of American English* (Springfield, Mass., 1949)
- 74) M. M. Mathews : *A Dictionary of Americanisms* (Chicago, 1951)  
 75) Partridge & Clark : *British and American English since 1900* (London, 1951)  
 76) Thomas Pyles : *Words and Ways of American English* (N. Y., 1952)  
 77) *Linguistic Atlas of the United States and Canada* (1939- )  
 Kurath & Others : *Linguistic Atlas of New England* (Providence, R. I., 1939-43)  
 Kurath & Others : *Handbook of the Linguistic Geography of New England* (Providence R. I., 1939)  
 Kurath : *A Word Geography of the Eastern United States* (Ann Arbor, Mich., 1949)